

# すっかんぽ

1991年 8月号

## 惣路さんの夢



岡山市から西へ約40km いた  
笠岡市に カブトガニ博物館  
がある。

カブトガニは、生物室にも  
標本があるし、最近、TV  
(NHK「地球ファミリー」や、TBS  
「わくわく動物ランド」など)

で放映されているので、知っている人は多いと思う。しかし、  
その映像が、このカブトガニ博物館の飼育池で撮られており、  
学芸員(研究員)の 惣路 紀通 さんが、関わっていること  
は、ほとんど知られていない。

私が 惣路さんに出会ったのは、夏休み中の8月9日であつた  
が、別に、会いに行つたわけではない。平成2年に完成した、カブ  
トガニ博物館を見学に行った時、何げなく、パンフレットをめく、



日本産カブトガニの分布

ていたら、カブトガニの実験飼育池の写真がのっていたので、  
ぜひ見せてはもらえないかと、受付の人にたのんでみたのである。  
最初は、「一般公開はしていないんですよ」とつれない返答  
だったが、30分後(その間、どうしようかと迷っていた)、再びアタックして  
みると、「栃木県から、わざわざ、見にきた!」という言葉が、相手の  
心をゆり動かしたらしく、奥の飼育池へと案内してくれた。

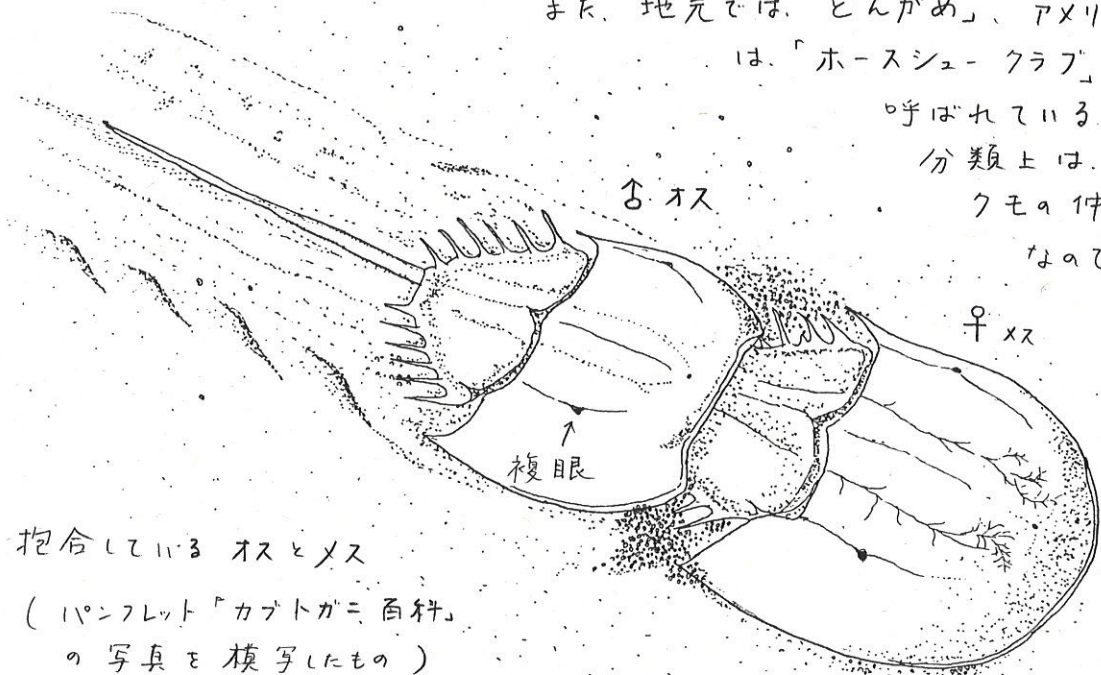
そして、そこにいたのが、惣路さんなのだ。

彼は、九州の出身で、大学では、道化を学んでいたが、  
大学院からカブトガニをテーマに選び、今年で13年になるという。



現在、カブトガニは、世界で4種類、生息しており、アメリカカブトガニ  
が集団で産卵にくる様子は、先日のNHK「地球ファミリー」で  
放送されている。しかし、日本にいるカブトガニは、約2000対  
(つまり4000匹)と激減しており、笠岡では40~50対と  
絶滅の危機に瀕しているらしい。昔は、中身を食べる人もいた  
が、脂肪が多く、くせがあつて、おいしいものではなかったようだ。

また、地元では、「どんがめ」、アメリカで  
は、「ホースシュークラブ」と  
呼ばれているが、  
分類上は、  
クモの仲間  
なのである。



抱合しているオスとメス

(パンフレット「カブトガニ百科」  
の写真を模写したもの)



カブトガニは、二億年前（つまり恐竜の時代）から同じ姿、形をしており（「生きている化石」）、その習性も独得だ。日本産のカブトガニは、親になるのに、14年位かかり、20回近く脱皮をすると、や、と、オス、メスの区別がつくのである。そして、スケッチのように、オスはメスをが、ちりと抱きかかえ、一生そのままでくらすのである。（寿命は20～25年と推定される）。11月から5月までは、どろの中での休眠し、6月から9月の大潮（潮の干満の差が最大になる）の日を中心に砂の中に産卵するのだそうだ。

いろいろと話をうかがっているうちに、惣路さんの情熱が伝わってきた。会うことができてよかったと思っていると「今夜、産卵の撮影があるんですが、よかったら、見にきてもいいですよ」という声がきこえてきた。や、ほり、柿木から、わざわざ来たかいがあったよ。



いそいで旅館にもどり、食事をして、再び飼育池に着いた時、20時を少し回っていた。昼間ののんびりとした風景とはうってかわり、ライトに照らされた、ビデオ機器が、緊張感を漂わせていた。撮影は、息のひたり合、た土屋さん親子が担当し、タコヤサンゴの産卵を研究している東大の、浜田先生がたち合っていた。

20:20 すでに何冊か産卵に入りはじめていた。

「きょうは、いけそうだ」「何がなんでもいく」という声のとびか、ている。

撮影は、グラスファイバーの先端についたカメラをメスの腹部からさし込み、モニターで確認しながら、産卵口をねらっている。

21:20 潮が満ちてきて、砂地は全て海水でおおわれる。

22:15 卵の姿は、すけてみえるが、なかなか出ない。もう1時間近く、この状態だ。海水は腰まできている。

23:00 満潮で海水は胸近くまできた。一時休憩。この後0:30まで、雑談。カブトガニ保護の現状をきかせてもらう。

0:30 「今夜は徹夜で撮影する」ということだが、旅館にわるいので、自分はここで断念した。

後日、惣路さんに電話で、あれから、うまくいったのか、問い合わせしてみた。「ええ、精子のとび出るシーンが撮れました。今日も撮影で徹夜です」という答えが返ってきた。「カブトガニを人工的に増殖させることが、最大の目的です」とも

言っていたのを思い出した。大いなる夢の実現のためには、人間はかくも夢中になれるのであろうか。

